

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会

会長 竹之下 洲一

編集者 広報部 玉利 良一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498 始良市歴史民俗資料館 0995 (65) 1553

蒲生麓・令和元年度「日本遺産」認定

濱口 純則



蒲生郷絵図(部分)

文化庁は5月20日に、地域の有形・無形の文化財をテーマにまとめ、魅力を発信する「日本遺産」に、鹿児島県の『薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く』を含む21道府県の16件を新たに認定しました。今回第5弾の認定で日本遺産は計83件となりました。

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを日本遺産 (Japan Heritage) に認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に発信することにより、

地域の活性化を図るものです。

『薩摩の武士が生きた町』では、鹿児島市、始良市、出水市、垂水市、薩摩川内市、いちき串木野市、南さつま市、志布志市、南九州市の計9市内にある城や庭園、町並みなど95件の文化財を「麓」のキーワードでまとめています。共通事項として、芋焼酎とつけあげ(さつま揚げ)の食文化も含まれ、鹿児島県では初めての認定です。

蒲生麓は、江戸時代に薩摩藩が配置した外城のひとつで、町割りは、御仮屋(現在の蒲生総合支所)を中心に9つの馬場(通り)と2つの小路からなり、江戸時代に今も残る武家門や生け垣・石垣などが昔を偲ばせます。



蒲生御仮屋門



蒲生麓の街並

蒲生麓の構成文化財は、「蒲生麓」「蒲生御仮屋門」「蒲生城跡」「御仮屋犬槇^{おかりやいぬまき}」「蒲生八幡神社」「蒲生のクス^{かみす}」「太鼓踊り」「蒲生の紙漉き」「掛橋坂」の9件です。

加治木稲荷神社について

竹之下洲一

精矛神社くわしほこじんじやを訪れた際、東側の一角にはかつて稲荷神社があったことを知りました。

島津家では初代忠久の出生伝説に因み、稲荷神社は氏神として、古くから尊崇そんすうされてきたはずなのに、加治木では何故現在なくなってしまったのか不思議に思い、その推移を調べてみることにしました。



島津義弘は、帖佐から平松を経て加治木に居を移した時、加治木屋形の一角（現加治木高校グラウンド）に稲荷神社を創建し、その後も江戸時代を通して大切に祀られてきました。

ところが明治に入ると、廃仏毀釈はいぶつきしゃくで義弘の菩提寺・本誓寺ほんせいじが廃寺となり、義弘の遺影などを守るため、新たに精矛神社が現在の護国神社の場所に創建されました。

明治29年（1896）、屋形跡に旧制加治木中学校が建設されることが決まると、稲荷神社は学校の雰囲気こわを壊すものとして、精矛神社と招魂社しょうこんしゃ（現護国神社）との間に移築されてしまいました。

さらに明治41年（1908）には、稲荷神社の場所に凱旋記念碑がいせんを建てることになり、稲荷神社は、その前年に島津家が開いた扇和園せんわえん（旧日木山邸跡、現精矛神社）に移築され、5月遷座式が行われています。

そして義弘300年祭に当たり、大正7年（1918）10月、扇和園の地に精矛神社が移転改築されると、稲荷神社はその存在価値を薄くしていった

ようです。

その後、稲荷神社は細々と存続していったものの、水害などにより壊れ、今は一對の狛犬を残すのみ（写真）で、神社の社殿はありません。

このように稲荷神社は、廃仏毀釈後創建された精矛神社に氏神としての地位を奪われ、徐々に衰退し、忘れ去られていったようです。

（参考資料：『始良市誌』別巻3・『柁城』第4、5号など）

能仁寺墓地

坂元清美

加治木島津家ぼだいじの菩提寺である能仁寺は、大字日木山の黒川山の麓にありました。初め、加治木島津家初代忠朗ただあきによって万治2年（1659）端山はやまの般若寺跡ほんにやじ（現在の加治木福祉センター敷地内）に建てられました。武運長久・子孫繁栄・夫婦菩提・郷内安全を図るためだけでなく、義弘の在世中の戦死者や罪によって殺された者を弔うために建立されたものです。



開山きどうは義堂和尚が務めたといわれていますが、端山は寺地が狭く人家が密集しているので、寛文10年（1670）日木山の現在地に移されました。

墓地には、初代忠朗から11代久賢ひさよしまでの墓があります。ただし、2代久薫ひさただの墓ちようねんじは長年寺に、4代久門ひさかど（重年）・5代久方ひさかた（重豪）は本家に復したため、墓は鹿児島ふくしやうじの福昌寺にあります。その他に、開山の義堂和尚や6代久徴ひさなるに招かれ、鮎英館いづえいかんしゅさい主宰を務めた秋岡冬日あきおかとうじつの墓があります。

義弘公と太鼓踊りについて

(義弘公没後 400 年に関連して)

梅田眞次・松下澄行

蒲生麓の日本遺産の構成文化財にも含まれる太鼓踊りは鹿児島県下各地にもあり、郷土の代表的な伝統芸能の一つです。

起源については諸説ありますが、始良市では次のように伝わっています。



慶長の役(1597~98年)後、義弘公が京に居たとき疫病が流行し、これを鎮めるため駿河の念仏踊りが町中を練り歩いていました。これを見た義弘公は、この踊りを朝鮮凱旋の祝い踊りにしたいものだと思い、家臣で山田郷の池田千兵衛尉と加治木の牧之瀬源左衛門の両名に命



二代目 池田千兵衛尉の墓

じ、この踊りの装束・歌・踊り方を習得させて帰らせたと伝えられています。牧之瀬は慶長11年(1606)亡くなり、その後池田はまず山田の士民に踊りを教えた

ということです。池田の没年や場所は不明ですが、下名疱瘡踊りを創始した息子の2代目池田千兵衛尉の墓は、上名地区奈良^{たもと} 袂に残されています(写真)。

もう一つの説は、慶長の役「泗川の戦」^{しせん}で義弘は、味方の軍を多数に見せるため多くの旗差しものを押し立て、鉦^{かね}や太鼓を打ち鳴らして明軍

に圧勝したと言われ、その様子を基に、家臣達が太鼓踊りを創始したというものです。

こうして、太鼓踊りは山田郷から始まり、加治木の西別府に伝わり、その後、加治木・帖佐・重富の各地に広がったとあります。しかし最初に伝わった山田では、人口減少や継承者の流失により途絶えてしまいました。

現在は、加治木地区に4団体、蒲生地区に3団体、始良地区に1団体があり継承されています。

奉納踊りは毎年、加治木が8月16日、蒲生・始良は8月21日に行われています。

○自己紹介

始良市社会教育課文化財係：福丸雅也

昨年7月に、人事異動により文化財係に配属となりました、福丸と申します。

かねてより、歴史や文化財に興味を持っておりましたが、文化財係の担当職員として仕事に従事できることをありがたく思います。

文化財係の職員としてはまだまだ半人前ではありますが、始良市は奥深い歴史や多くの文化財に恵まれており、知れば知るほどその魅力に深く感じ入っています。

文化財業務は、屋内外の多種多様な業務に対応していかなければならず、体力勝負の面もありますが、始良市の文化財行政に早く一人前として貢献できるように頑張りますので、どうぞよろしく願いいたします。



蒲生中学校3年生郷土学習

新園淳一郎

蒲生中学校から文化財係を通じて依頼のあった郷土史学習授業「もっと郷土を知ろう」への協力依頼に対応して、3年生と担任の先生方と我々スタッフの、総勢約80名で蒲生麓を中心に郷土の史跡を訪ねて歩きました。巡回は、3班編成として各班が交錯しないようなコース設定を行い、実施しました。

事前に、座学で「蒲生の郷土史」について概略説明があり、生徒達の興味はすこぶる高く、ガイドの説明に耳を澄ます生徒、ノートに記入したり写真を撮る生徒など、一生懸命さが伝わる素晴らしい体験学習になったと思います。

生徒達からは「蒲生にこんな歴史があったなど、夢にも思わなかった」、「先人達の偉業を知って同郷人として誇らしい」など、多くの意見がありました。

後日、全校生徒が参加し、「蒲生麓周辺をめぐる」の学習成果が披露されたとのことでした。



今回の体験が生徒の皆さんの自己研鑽や町の発展に少しでも寄与するものであればと祈念するところです。

コースの見どころ

蒲生観光交流センター、麓武家屋敷、武家門、御仮屋門、永興寺跡、招魂社、記念碑群、蒲生八幡神社、蒲生のクスなど

歴民館ミニ展示会(開催中) 「始良市内の田の神 50選」

歴民館では、2階ロビーにおいて始良市内の田の神石像 50 体を全紙や半切の写真パネルで展示しています。実物資料としては、小型の持ち回り田の神像や田の神舞の時の面など 10 点と一緒に公開されています。期間は6月から9月末日までの予定です。各地の表情豊かな田の神さあをお楽しみください。



西田の田の神



寺師の田の神

編集後記(令和初刊行にあたり)

平成から令和へ元号が変わり、新しい時代への期待と不安が半ばしていますが、予期しない事故や事件が多発し続けています。戦争が起きないのは当然のこと、安全で安心して暮らせる日常が継続できる時代であってほしいものです。

本誌でも取り上げましたが、蒲生麓の日本遺産の認定や、義弘公没後 400 年記念の諸行事、加治木くも合戦のユネスコ未来遺産の認定(認定は去年)等々、始良市にとっては重要な意味を持つ一年になると思われます。

我々も始良市内の歴史や遺跡をガイドすることを通じて、市の魅力アップに、微力ではありますがお役に立ちたいと決意しています。どうぞよろしく願いいたします。